

巻頭言

横浜キャンパスの新しい船出を契機に

中村 雅子



1997年の開設以来、16年間、環境情報学部1学部であった横浜キャンパスに2013年4月より2学部が誕生し、一つの節目を迎えることになりました。

振り返るとこの間の横浜キャンパスの歴史が懐かしく思い出され、またこの間の情報コミュニケーション技術の発展を思うと隔世の感を否めません。

環境情報学部が開学した1997年当時は、今日、広く社会の基盤となっているコンピュータ・ネットワーク・システムが、一部の研究者や技術者の手から溢れだし、人びとの生活世界へと浸透し始めた時期でした。横浜キャンパスは、当時から国内でも有数の最先端ネットワーク・インフラを整備しておりましたが、一方で初年度の入学者調査では、学生の4割以上が今までパソコンにほとんど触れたことがないと回答し、リテラシー演習の最初の時間にはパソコンの起動とシャットダウンの仕方を教えたことを懐かしく思い出します。

これに先立つこと2年、1995年はインターネット元年と言われ、当時は世界的にもインターネットサービスの本格的な普及や、人びとにとってコンピュータが急速に身近になるきっかけになったOS、Windows95の発売もありました。社会的にも阪神淡路大震災の発生などで、情報の的確な共有の重要性という意味で、インターネットへの社会的注目が高まりました。そのような時代背景にありながらも、上記の一期生のエピソードのように、当時、まだインターネットやコンピュータに日常的に触れる人びとはどちらかという少数派でした。

その後、1999年には、NTTdocomoがiモードのサービスを開始し、今日のスマートフォンに至るモバイル・ネットワークの先鞭をつけました。2000年には、Googleが日本語版サービスを開始、2004年にはすでに、MySpace、Facebook、mixiなどのSNSが流行し始めます。瞬く間にコンピュータ・ネットワークを利用したコミュニケーションが市民生活の随所に支脈を伸ばし、2005年にはティム・オライリー (Tim O'Reilly) の講演「What Is Web 2.0」で「ウェブ2.0」というキーワードが人口に膾炙されます。

2010年代に入る頃には、すでに提供されていたいくつかのサービス、USTREAM、Twitterなどが日本で普及し始め、端末では2007年に発表されたiPhone (アイフォン) やAndroid (アンドロイド) だけでなく、各社から多機能携帯電話 (スマートフォン) が多数発表されています。

そして、2011年にはチュニジアやエジプトをはじめとする諸国でソーシャルメディアや携帯端末での呼びかけをきっかけとする政変が発生。またご存知のように東日本大震災が起こり、TwitterなどのSNSの活用や震災の映像のYouTubeへのアップロードなど、災害時のインターネットの有用性 (と危うさ) が再認識されることになりました。

この間、インターネットは一部の専門家のものから、誰もが関わり、主体的な情報発信者となるものへと、大きく位置づけを変えました。一方、人びとが情報の受発信者としての責任を負う当事者意識をそれだけ育ててきたのか、という点になると、まだ心もとない状況にあります。しかし教育研究のために最先端のインフラを享受できる本キャンパスのような恵まれた情報環境にあるのであれば、なおのこと、自覚を持ってそれを有効活用することが課せられているといえるでしょう。

この4月から東京都市大学でも全学的に情報セキュリティポリシーが導入されることも踏まえて、本号では特に、情報セキュリティが専門のメディア情報学部家木教授、知的財産が専門の張准教授に、それぞれご専門の観点からの解説を寄稿頂いています。

インターネットの動向として、「サイバー・フロンティア」としての自由な空気を維持したいという動きと、無法地帯にならないよう既存社会の一部として既存の法制度の枠組みの中に位置づけるべきという動きは、常にせめぎ合いの下にありました。いかにインターネットの自由な試行錯誤からくる「新しいものを生み出す力」を維持しつつ、既存社会の秩序と折り合い、あるいは新しいルールを作っていくか。角を矯めて牛を殺すようなことにならないように考える、ということも本キャンパスに課せられた課題の一つと感じます。

本キャンパスがこれまで培ってきた文化や研究分野の多彩さはそのような課題を考える上でも、他にない優れた環境となっているのではないのでしょうか。

本学の情報メディアに関わる研究領域は大変に広く、また研究対象としての情報コミュニケーションと並んで、課題解決に取り組むツールとしての観点も両輪として併せ持っています。新たに生まれる環境学部、メディア情報学部が、いずれもこれまでの伝統を引き継いで、今日の社会の諸問題に取り組む学部としてスタートする中で、改めて情報メディアのあり方を考える機会としたいと思えます。

NAKAMURA Masako

東京都市大学メディア情報学部長